

「現役学生の皆さんが将来の中央大 「勇気をもって何かに参加し

中央大学の河合久・新学長に、「HAKUMON Chuo」学生記者の西沢美咲さん（総合政策2）がインタビューしました。

「勇気をもって何かに参加し、行動することが大切」「さまざまなことを知り、刺激し合うのが学生の良さであり特権だ」「生涯の友を見つけてほしい」—。河合学長は現役学生に熱いメッセージを送り、自らの学生時代などについても大いに語ってくれました。

聞き手 学生記者 **西沢美咲**（総合政策2）

さまざまなことを知って刺激し合う。 これが学生の良さであり特権

— よろしくお願ひします。まず、私たち現役の中大生に求めたいものは何でしょうか

河合久学長 何といても志を持ち続けて、気概を表に出して欲しい。中央大学を表す『質実剛健』という言葉は、決して“男社会”という意味ではなく、「健康そのものであり真面目で頼りがいがある」という意味です。中央大学の歴史を顧みても、昔の学生も今の学生も同じようなイメージがあります。先輩から後輩へ伝授され、受け継がれている学生気質であると思います。ただ、気概や志を持っているだけでは十分ではなく、勇気をもって行動に移してほしい。他人の目や結果を意識したりせず、まずは何かに参加をし、

行動できるような中大生になってほしいと思います。

— コロナ禍では「行動したい。何かしたい」と思ってもできないことがあると思いますが、学生の私たちはどのようにして行動していけばよいと思いますか

河合久学長 コロナの影響で、学生も教員も大きな制約下にあり、本来は大学で得られるようなものを得にくくなっていることは非常に残念に思います。しかし、学生同士でオンラインのコミュニティーを作ったり、先輩がWebexを使って後輩に呼びかけを行ったりとコミュニケーションを図り、いろいろな形で気概や志を維持できるはずで

大学からの情報をキャッチすることも必要でしょう。たとえばコロナ終息後に留学したいとなれば、選考はすでに始まっているかもしれない。来年度から受講したいゼミがあるなら、今の段階から調べる必要があります。それでも心配な面があり、もし前に進めない場合は、悩まずに学部の事務室や誰でもいいので打ち明けてみることも必要だと思います。私自身、大学生になったとき、いろいろな地域から集まった人たちの話を聞いて、「今までの自分の世界はなんと小さかったのか」と感じました。さまざまなことを知り、互いに刺激し合う。これが大学生の良さであり特権であると思います。制約の中でも頑張ってみることが大切でしょう。新たな発見や将来の進路に影響するようなことも見つかるかもしれません。

「学価値を作る」 「で行動しよう」



中大卒業生は社会での貢献度が高い

——コロナ禍の現状からみて、対面授業や登校してのキャンパスライフの楽しさ、その意義についてはどのように捉えていますか

河合学長 対面授業やイベントも制限を受ける。それでも何かを企画することは楽しいと思います。みんな声を出し合って、いろいろな制約の中でも努力をして、難しいと思うのが楽しみを見つけたい。コロナで悩んでいるのは学校だけではなく、企業や役所なども苦労している。皆さんが社会に出たときに制約に向かってチャレンジするという点では、社会の先輩たちと共通することやってきたということになる。学生時代の意義として捉えるのはふさわしくないと思いますが、結果として結びつくでしょう。まずはやってみ

る、そして楽しみを見つけられるように前向きに頑張っていってほしい。

——「中央大学卒」と卒業生が誇りに思えるのはどのような点でしょうか

河合学長 卒業生は、伝統的には法曹界や会計などの専門職に就くことが多いですが、それだけではなく、あらゆる分野の民間企業、公務員、またスポーツや芸術、文化の担い手として目を見張る活躍をしている人も多い。自分のゼミの卒業生の活躍や、名刺交換をした際に卒業生と出会ったときに社会でのつながりを感じ、頼もしく、そしてうれしく思います。社会での貢献度が高い人の中に、中大生が多いと感じますし、私自身が中央大学の卒業生であり、

教員であることに誇りを持っています。卒業生に接すると、この方々が中大生でよかったと思える人が多い。今の在学生の皆さんにもそうなってほしいと期待しています。



(インタビューは学長就任日の5月27日に、感染症対策に配慮しながら、多摩キャンパス学長室で行いました)

「卒業後も『たゆまず学び続ける姿勢』を」 「人生観を磨こう」

——中央大学をどのような大学にしていきたいでしょうか

河合学長 中央大学は実績と伝統があり、今でも十分に存在感があり、社会における評価も高い。これは136年の歴史の中で、先人たちが築き上げてきた努力の成果があるからです。ただ、将来の中央大学の価値を作るのは、実は今いる学生です。大学は学生が作る世界です。それを支えていくのが私たち（教職員）の仕事であり、皆さんが中央大学で学び、価値を高めていく手伝いをする。そのためには、中央大学がもっと開かれるべきだと思う。社会に対応するように改革や

変化をさせていく努力をする。学生のニーズにしっかり応えられるようにしていかなければならないと考えています。学生の皆さんは、学校を作る担い手であり、私にとっては頼りがいのある後輩でもあります。

——学生たちに4年間の学生生活で得てもらいたいことは何ですか。どのような学生生活を送ってほしいでしょうか

河合学長 人との関係を重視するような学生生活を送ってほしい。自分と他者との関係を自覚することから人生観を磨いてほしい。大学生はそれを考えていい世代です。精神

論になってしまうけれど、そういった気持ちを持ち続けてほしい。中大生はよく勉強をしますが、ただ学力が高いというだけでなく、いろいろな活動を通じて自分自身からどうやって情報を発信するか、情報発信能力やコミュニケーション能力など、自分が人として優れている点を磨いてほしい。また、学ぶ姿勢は大学生のうちだけでなく、卒業してからも維持してほしい。「たゆまず学び続ける姿勢」です。可能であれば良い人間関係を築き、生涯の友を大学で見つけてほしいと思います。

面倒見の良さは「家族的情味」の表れ

——中央大学の“ウリ”は何でしょうか。入学すると、どんな良いことがありますか

河合学長 しっかり学ぶことができ、関心事を追求できる。教員の面倒見がよく、しっかりきちんと教えてくれる。しかし、受け身では得られないと思います。与えられたことだけをやるという姿勢だと良さに気づけない可能性がある。気概を持って

高い志を持った人は、中央大学の本来の良いところを享受できると思います。大規模な大学だが面倒見がいいというのは、教職員を含めて中央大学に長く受け継がれてきた「家族的情味」の表れでもありますね。

——中央大学に弱点はありますか。それをどのように工夫して改善しようと考えますか

河合学長 立地が都心なら違うのかなとも思います。そういう意味で郊外型というのは一つの弱点です。法学部が移転した後の多摩キャンパスを考えるのと同じで、弱点を払拭するように「新生・多摩キャンパス」、新たな組織や学部を視野に入れた改革をする必要があります。また、学部の“囲い込み”があるように思います。今は閉鎖的で学部間の壁が厚い。FLPなどの制度はありますが、なかなかぬぐえない。仕組みの問題ですから、教職員の努力で変えていきたい。壁を薄くすることで恩恵を受けるのは学生たちですから。学部間が開放されれば、いろいろな勉強ができたり、学部を超えていろいろな先生方と接したりしていけると思います。



会計学の恩師に魅せられて学問の世界に

——河合学長はどのような学生生活を送りましたか。もっとも印象に残っていることや、当時の悩みなどがあれば教えてください

河合学長 私は(都心の)お茶の水校舎の時代に入学し、2年時から多摩キャンパスで過ごしました。当時は多摩への移転反対運動もあり、大学構内がロックアウトされたり、試験はレポートに変わったりと、現在と原因は異なりますが、少

し似ている状況でした。どうなるのかと不安に思っていたところ、救ってくださったのがゼミの根本光明教授(当時)でした。情報化教育が盛んになりかけた頃で、ゼミでは簿記もコンピューターのことも学びました。根本先生は伝票会計を普及させた第一人者です。会計学はこんなにも扱う領域が広いんだと、素晴らしい先生に教えられ、魅せられました。根本先生がいたから、この

道に引き込まれたんです。お酒にもよく連れていってもらいました(笑い)。

勉強は本気でやろうとすると辛い。当たり前です。経験を積んでいかなないと勉強は面白くない。でも、研究することがやがて教えることに結びついたときの喜びは何にも代えがたいと思います。



▲学生記者の西沢美咲さんと河合久学長

河合久学長

かわい・ひさし。1958年生まれ、東京都出身。中央大学商学部会計学科卒業、同大学院商学研究科博士前期課程修了。中央大学商学部教授、商学部長、副学長、国際経営学部長などを歴任。5月27日に学長就任。中央大学附属高校時代はスキー部に所属。大学時代は家庭教師のアルバイトの評判が口コミで広まり、中学生に頻繁に教えていたという。

「自分から動く姿勢」「学び続ける姿勢」 前向きに学生生活を送りたい



河合久学長へのインタビューは、私にとって多くの学びがあり、貴重な経験になりました。学生記者として、対面取材は今回が初めてで緊張しました。カメラマンを含む広報室の方々が何人もいて、学長室での本格的な取材でした。

インタビューをしていくうちに、河合学長の話しやすく優しい人柄、気さくな受け応えで場が和み、私自身も打ち解けて話げできました。学生の気持ちに寄り添い、在学生である私の話に耳を傾けてくださり、ありがとうございました。

インタビューを通して印象に残っているのは、コロナ禍でさまざまな制約がある中でも、「やってみることが大切である」ということです。私の心に響く言葉でした。

行動することには勇気がいります。しかし自分から積極的に飛び込んでみることで、新たな発見や出会い、経験ができます。私も学生記者に応募して、こうして取材できることや、オンライン新歓に参加したことでサークル活動も行うことができている。「自分から動く」という姿勢が大切だと実感し、まずは与えられた環境の中でできることをやるべきだと強く感じます。受動的にならずに、大学や先輩からの情報をキャッチし日々の行動をしていくことが大切だと思いました。

もう一つ、インタビューの中で印象に残っている言葉があ

ります。それは「たゆまず学び続ける姿勢」です。河合学長は、中大生はよく勉強するとおっしゃっていました。学生生活では、授業やサークル活動などで多くの学びがあります。そして、中央大学には学びに最適な環境が整っています。その環境を利用して今後の人生で役に立つような学びを吸収していきたいです。

河合学長の話にもありましたが、中央大学の価値を作るのは学生である私たちなのだとは自覚し、胸を張って前向きに学生生活を送ることが私たち中大生の使命でもあると感じました。

(学生記者 西沢美咲)





「開かれた大学」へ 教育組織・拠点の相互作用を強める

河合久学長のインタビュー第2部では、建学の精神「**實地應用ノ素ヲ養フ**」に基づく中央大学の今後の舵取り、新しい時代の要請に即した最高学府としてのあり方、多摩と都心の二大キャンパスの方向性などについて、大学広報室が尋ねました。

——中央大学は、建学の精神「**實地應用ノ素ヲ養フ**」や、**実学精神**をもとに、長い歴史と伝統の中で学生の成長を育んできました。社会や地域に開かれた学問の府として、目指す舵取りの方向性やメッセージをお願いします

河合久学長 建学の精神「**實地應用ノ素ヲ養フ**」は、その基礎が、研究と学問の姿勢にあると思っています。その学問対象を探究していくということは、まず現実世界を観察

して知ること。そこに対して分析を行っていくことによって理論・仮説が形成される。私たち大学では形成された理論を教育に還元していく、あるいはもともと研究の対象となっていた実社会にそれを還元していく。そういうような研究、学問の姿勢に根差した教育観を表しているのが「**實地應用ノ素ヲ養フ**」という言葉だと思っています。

「**素**」というのは基本的には「知識を獲得する」ということ、それを

「**應用**」するということは、その知識を社会との関係で役に立たせるということですから、もともとこの教育の精神、教育観に、学問や人、知識が周辺の外界との関係を持っているということを前提にしていると思うんですね。これが本学の設立当時から意識されていたということは、現代の科学が定着している中であっても通用するということで、たいしたものであると思っています。

文理の連携は建学精神 「**「**実地應用ノ素ヲ養フ」の時代に即した対応

「実地應用ノ素ヲ養フ」という教育観は、中央大学のこれからの発展にどうしても必要な、「開かれた大学」というコンセプトと関係していると思っています。「開かれた」ということは、社会を構成する実体や、出来事を認識するときに、常にそのシステムと外界との相互作用を扱う、その相互作用が強固なときに、「開かれる」「オープンである」という意味になる、というように理解しています。

そうすると、実地應用ノ素の「素」の部分の基礎となる「知識」につい

ても、実はそういうことが言えるであろうと思っています。つまり、よく学際とか言われているように、ある領域、ある研究分野が他の分野と相互作用を果たしている、すなわち、ドメイン(領域)の開放になります。専門領域を表象している各学部、大学院といった教育組織の開放、すなわちそれらの相互作用、連携が必要になる。

それがひいては拠点の問題になり、拠点同士の相互作用、これが強くなっていくと、それらが開放されるという認識になります。たとえば、

多摩と都心、ある学部と他の学部の拠点と地域、社会との相互作用、こういったものが中央大学に求められているであろうと思います。「実地應用ノ素ヲ養フ」という考え方は、時代に対応していかなければならない。もはやこの社会は、文系、理系と分けられない、複合的な要素で成り立っていますから、いまある中央大学の教育組織、拠点の相互作用を強めていくことが、本学のさらなる「開かれた大学」ということにつながっていくのではないかと考えています。それを目指していきたいと思っています。

「ロー&ロー構想」を近接エリアで実現



——法学部の都心移転の狙い、並びに法学部と法科大学院の連携を軸とする、文部科学省が打ち出す「3プラス2」、5年間の学修環境、こうしたことを含めて法曹人材の育成策についてはどう考えていますか

河合学長 新しい法曹養成制度の下での法曹教育の展開に、法学部の都心移転は大きな力をもたらすと思っています。大事なことは、単に多摩キャンパスから都心キャンパス、茗荷谷に引っ越しをするわけではないということです。学部3年、法務研究科2年、合計5年の修学期間で法曹志望者を育てることが可能となりますが、制度それ自体は、法学部が多摩にあっても可能です。もともと中央大学では、その新しい制度とは関係なく、法学部、

法学部を基礎とする大学院法学研究科、さらにはロースクール(法務研究科)、これらの一体的な運用によって法曹教育をさらに充実させることができるだろう、と考えていたわけです。

その考え、構想を私たちは「ロー&ロー構想」と呼んでいましたけれども、都心移転によって、もともとロー&ロー構想を、非常に近い、狭いエリアの中で実現できる、これがまずは一つの大きな効果であると思っています。もう一つは、近隣の理工学部や国際情報学部という理系の色彩の濃い学部との連携も進むのではないかと、大いにそこに期待が持てる。法学部がそのように別な形で発展することになると、新たな中央大学の法学教育、これを社会に示すことができる。言い換えますと「新生法学部の誕生」が期待できると考えています。

多摩キャンパス文系5学部にシナジー効果を

——多摩キャンパス、都心キャンパスの二大キャンパスを土台とした全学的な教育・研究への支援体制の構築についての考えを教えてください

河合学長 法学部移転後、多摩キャンパスには5学部が残ります。都心キャンパスには3学部と2つの専門職大学院で、教育組織の数という点だけを考えますと、どちらも5つずつですから、まさに二大キャンパスという印象が強くなると思うんですけれども、一方で都心を一括りにするといっても、近隣ではあっても同じ校地に存在するわけではないので、事実上、拠点の分散化といったことは否めないと思います。

多摩については、先ほどの「開かれた大学」という考え方につながるのですが、法学部移転後の文系5学部間に、何らかの相互作用、相互

関係性が必要かと考えています。これは意識的に関係性をつくっていかなければいけないわけです。意識的に関係性をつくって、そこでシナジー（相乗効果）を働かせていくと、新たな学部の創設や、連携組織の創設につながる。いまある5学部のリソースをいかに有効に活用していくか、ということで、新生法学部が都心キャンパスで展開されるなら、新生社会科学、人文科学を多摩で展開していく。さらに、オープン化や検討が進み、新しい領域が出てくるかもしれないですね。いまの学位にこだわらない新たな学位といったものを中央大学が目指してもいいと思います。



河合学長はこの後、情報科学技術の発展の基礎と応用について研

究する「AI・データサイエンスセンター」（2020年4月開設）と、情報科学技術に対して倫理的、法制度的、社会的課題という側面からアプローチして研究する「ELSIセンター」（2021年4月開設）を、情報科学技術研究の両輪と位置づけた上で、社会における正しい情報政策、情報活用に結び付けるため、2つのセンターが1つの大学に設置された意義は大きいと強調しました。

さらに、国連が提唱するSDGsや、ダイバーシティへの取り組みについて、現代社会の当然の社会規範として受け入れて、関連する諸課題に対応していくという考えを示しています。

（インタビューの詳細は、HAKUMON Chuo Web版で読むことができます）



中大の環境を存分に活用して大きく成長してほしい

福原紀彦前学長



福原紀彦・前学長（中央大学法科大学院教授）は退任にあたり、現役の中大生たちに次のようなメッセージを寄せました。福原前学長は退任後、一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）の代表理事 会長にも就任しています。（メッセージは一部を割愛しています）

「（退任という）この機会に中央大学新聞の爽やかな学生記者の取材に応じた時のメモを文章化してお届けします。まじめでおとなしく堅実で優等生タイプの学生が多いとの評判を、あるときは、嬉しく誇りに思い、これからも維持されるべき学風と信じ、あるときは、もっと積極的に行動しようとも激励してきました。知的レベルや身体能力が高く、スマートな若者像を、私の世代から観ると羨ましくもあります。しか

し、自分で自分の可能性を早く悟ってしまっているかのように見えたり、自分の判断や行動の基準を探しあぐねて、他人からどうみえるかを気にしすぎたり、外部の風評や基準に安易に従わされているとしたら、今一度、大学時代に自分探しをしてみることが必要だと思います。中央大学の歴史と伝統で培われている環境を存分に活用して、もっともっと大きく成長して欲しいと思います」